

社会主義社会の過渡期的性格

——毛沢東の社会主義政治経済学への画期的な貢献——

小野進

序

- 一 社会主義社会の性格規定把握の意義
- 二 所謂「過渡期階級闘争理論」の形成
- 三 社会主義社会の過渡期的性格と「スターリン問題」

序

戦後、日本のマルクス主義思想界に重大な衝撃をあたえたかつての「社会主義」圏からの国際的影響は、比較的古い時点では、ソ連共産党第二〇回大会（一九五六年二月）、スターリン批判、ハンガリー事件（一九五六月十月）、新しい時点では、所謂中ソ論争（マルクス・レーニン主義と現代修正主義との論争）、中国のプロレタリア文化大革命（¹）それにソ連社会主義のチエッコ侵略事件等があげられるであろう。ソ連共産党はソ連共産党第二〇回大会において、「スターリン批判」を口実に、国内的には、ソ連の革命的な人民と相反する方向、修正主義的（²）路線に転換し、国際的には、国際共産主義運動の戦略規定として△平和共存路線▽を設定し、世界の革命的プロレタリアトをはじめとする世界の被抑圧人民と被抑圧民族の利益に徹底的に反対した。他方、中国共産党が、その時点で、

社会主義社会の過渡期的性格（小野）

四三（二二九）

ソ連共産党第二〇回大会および「スターリン問題」 \vee と「ハンガリー問題」 \vee に対してとった態度と評価については、「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」⁽³⁾(一九五六年四月五日『人民日報』)と「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」⁽⁴⁾(一九五六年十二月二十九日『人民日報』)の二論文において知ることができる。この二論文は、プロレタリア文化大革命(以後、プロ文革と略す)という政治革命の経験を経た中国の現状からすれば、非常に不十分ではあるが、ソ連共産党第二〇回大会の修正主義的観点の批判であり、所謂「スターリン問題」 \vee における中国の立場を表明したものである。とりわけ「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」において、ソ連共産党第二〇回大会の「議会の道」なる観点に対して「十月革命の道」⁽⁶⁾を対置し暗にソ連共産党のフルシチョフ修正主義の観点を批判したのであった。所謂中ソ論争は、中国共産党(マルクス・レーニン主義党)とソ連共産党(現代修正主義)とのあいだでおこなわれた国際共産主義運動の戦略と戦術をめぐる歴史的な論戦であるが、中国共産党によるソ連共産党に対する仮借のない批判によって、ソ連共産党の政治路線が、マルクス主義の普遍的原理を否定し、現代修正主義に完全に転落していることが証明された。⁽⁷⁾中国共産党によれば、共産党から修正主義党に変質した党に国家権力をにぎられ資本主義国となったソ連社会は、チェッコ侵略を契機に「社会帝国主義国」にまで「成長」をとげた。従来、比較的順調に社会主義革命と社会主義建設をすすめてきたかのように思われた中国も、対外的には、国際帝国主義と現代修正主義からの影響をそして国内における修正主義的諸傾向からの影響とをまぬがれることはできずプロ文革によってそのことが世界中にあきらかになった。プロ文革によって、中国社会主義社会の内外の階級闘争を反映して、中国共産党内部にも、 \wedge 社会主義と資本主義の二つの道の闘争 \vee 、 \wedge プロレタリア革命路線と反革命修正主義路線の二つの路線の闘争 \vee 、 \wedge プロレタリア階級

の世界観とブルジョア階級の世界観のあいだの闘争^⑧が長期にわたって存在していたことがあかるとみだされた。中ソ論争、プロ文革、ソ連社会帝国主義のチェッコ侵略等の所謂^⑨社会主義圏における近年の重大な出来事によって、日本において、社会主義に対する従来のイメージが大きく動揺し、社会主義をめざす人々や、社会主義に関心をもつ人々の中に、社会主義とは何か^⑩という問いかけがおこなわれるようになった。社会主義とは何か^⑩という問いかけに対する答えは、マルクス主義の古典的規定を抽象的、一般的に再解釈、再構成したりしただけで答をだすことはできない。もちろん、マルクス主義の普遍的真理たるプロ独裁を確認する意味で、古典にあたることは何よりも重要である。独裁という科学的概念は「なにもにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなものも意味しない。『独裁』という概念は、これ以外のなものも意味しない」(レーニン「独裁の歴史の問題によせて」『レーニン全集』⑩大月版、三五四〜五ページ)。プロ独裁の問題をぬかして、古典的規定を再構成して社会主義論をあれこれあげつろつてみてもたいした現実的意味をもたない。むしろ害毒をながすことになる。一般的にいつて、マルクス主義の発展の基礎は、世界のプロレタリアートの社会的実践の深化と発展に依存している。だとすれば、社会主義の問題もやはり、ロシア十月革命以後のすべての社会主義社会におけるプロレタリアートの社会的実践、とくにプロレタリアート独裁の歴史的経験を現実的出発点にすえなければいけないのではないか。プロ独裁をぬきにした社会主義など考えることはできない。プロレタリアート独裁の歴史的経験を科学的・哲学的に総括(分析と総合)することによって、はじめて「社会主義とは何か」という問いかけに答えることになるのである。中国では、社会主義の下でひきつづき革命をおこない、資本主義の復活を防止する^⑪という、毛沢東学説は、

中国のプロレタリアート独裁の歴史的経験とロシア十月革命以来の国際的なプロレタリアート独裁の歴史的経験を系統的に総括することによって得られたものであるといわれているが、もしそうだとすれば、毛沢東のこの学説は、毛沢東の立場から、△社会主義とは何か▽という問題に真正面から解答をあたえようとしたと考えることができる。

プロ文革の理論的基礎は、プロレタリアート独裁の下でひきつづき革命をおこなうという学説である。すなわち、継続革命の学説である。プロ文革の現実的形態は非常に特殊中国の形態をとってあらわれているが、プロ独裁下での継続革命は、社会主義社会に共通した△階級闘争の法則▽であると、中国のマルクス主義者は考える。もし、中国のマルクス主義者が考えるように、プロ独裁下での継続革命の学説が、現代の社会主義社会に共通した問題であるとすれば、このことは現代のマルクス主義にたいする非常に重大な貢献といわねばならない。このように考えるならば、プロ独裁下での継続革命を主張した毛沢東学説は、マルクス主義の見地にたつかぎり、毛沢東思想を研究するさいさけてとおることのできないほどの根本的な問題を提示している。

プロレタリアート独裁の下での継続革命の学説の基本的前提となりうるものは、社会主義社会の過渡期的性格をどのように把握するのかという問題、換言すれば、社会主義社会から共産主義社会（無階級社会）への具体的な移行の法則の問題であり、同時に社会主義社会から資本主義社会への平和的逆移行の問題をも内包する。本稿では、したがって継続革命学説の前提である社会主義社会の過渡期的性格の理論的把握がどのようなものであるのかを考察することである。そうすることによって、毛沢東思想（現代マルクス主義）の提起した若干の理論問題が整理できたらよいと考えている。社会主義社会の過渡期的性格は、死滅しつつある資本主義と生れようとする

共産主義とが闘争し、階級、階級矛盾そして階級闘争が存在する時期として表現される。資本主義から共産主義への過渡期としての社会主義社会に階級、階級矛盾、階級闘争があるのかないのかという問題は、マルクス、エングルスはいうにおよばずわずかな年月ながらも社会主義社会の経験をもったレーニンさえもあまり明確に示なかつた問題であり、現代の社会主義社会には文字通り根本的な問題である。社会主義社会に階級が存在しないと考えれば、共産主義へ移行するには、科学技術革命を中心にして、生産技術だけを発展させればよいということになる。生産技術だけを発展させるだけで共産主義へ移行できればよいが、まったく逆で、それは、資本主義への逆移行になる。毛沢東は、社会主義社会の全歴史的時期にわたって階級、階級矛盾そして階級闘争がずっと存在することを発見した。これは、社会主義政治経済学への画期的な貢献といわなければならない。レーニン自身は、現実の社会主義社会の諸問題についての実際の経験はあまりにもとぼしかった。したがって、いかにレーニンといえども、社会主義社会の全歴史的時期に階級がずっと存在することを理論的に把握することがもともと不可能であつた。それ故、レーニンが、社会主義社会における階級の有無について何も言及していないからといって、これを基準に、毛沢東の主張を批判することは、教条主義である。過去の基準で現代を批判することはできない。科学的な理論は、社会的実践からのみうまれるのである。だが、修正主義は、教条主義批判を口実に、過去から現代にいたるまで、そして、世界中どこにでも適用できるマルクス主義の普遍的真理を否定するのである。なお、本稿は、問題をあくまでも現代のマルクス主義体系における思想問題および理論問題の一環として把握することであつて、中国社会主義経済の実証的研究を意図したものではない。毛沢東思想の提起したするどい思想的、理論的問題を考察することによって、日本のマルクス主義思想をより深く理解する手がかりになればよい

と考えている。毛沢東思想はマルクス主義ではないと考える見地は論外として、今日、中国から学ぶべき重要なものがあるとすれば、それはマルクス・レーニン主義の発展としての毛沢東の思想であり、理論である。毛沢東思想とは何かということは、かならずマルクス主義とは何かということに答えることになる。

(1) 社会帝国主義という概念は、以下のようにレーニンによってはじめて使用された。「フェビアン帝国主義」と「社会帝国主義」これは同じものである。それは、口さきだけの社会主義、実際の帝国主義であり、日和見主義が成長して、帝国主義になったものである。」（レーニン「第三インターナショナルの任務について」ラムゼイ・マクナルドの第三インターナショナル論）『レーニン全集』②⑨大月版、五一三ページ）。

「今日のいわゆるドイツ「社会民主」党の指導者たちが、「社会帝国主義者」——すなわち、ことばのうえでは社会主義者、行動のうえでは帝国主義者——という名前を頂戴しているのはもつともことながら、ホプスンはずで一九〇二年に、イギリスには日和見主義的「フェビアン協会」に属する「フェビアン帝国主義者」が存在することをしるしている。」（レーニン「帝国主義」宇高基輔訳、岩波文庫、一七七ページ、傍線引用者）。

(2) 修正主義とは何か。レーニンの規定にしたがえばつぎのようである。「終局目標は無であり、運動がすべてである」——このベルンシュタインの標語は、多くの長たらしい議論よりもずっと修正主義の本質をあらわしている。そのばあいばあいで自分の行動を決定し、日々の諸事件に、些細な政治の風むきに順応し、プロレタリアートの根本的利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化的基本的特徴とをわすれ、目前の現実の利益または仮想された利益のためにこの根本的利益を犠牲にすること、——これが修正主義の政策である。」（レーニン「マルクス主義と修正主義」『レーニン全集』⑩大月版、二〇ページ、傍点引用者）。毛沢東の修正主義の規定はこうである。「マルクス主義はかならず発展し、実践の発展にもなつて発展しなければならず、停滞してはならない。とどまっていた、いつも型にはまったことをくりかえすなら、それは生命をうしなってしまう。しかし、マルクス主義の基本原則はまたそむいてはならないものであって、それにそむけば、あやまりをおかすことになる。マルクス主義を形而上学的な観点でとりあつかい、これを硬直したものとみること、それは教条主義である。マルクス主義の基本原則を否定し、マルクス主義の普

遍的真理を否定すること、それは修正主義である。修正主義は一種のブルジョア思想である。修正主義者は社会主義と資本主義の区別をまっ殺し、プロレタリアート独裁とブルジョアジー独裁との区別をまっ殺している。……中略……現在の状況のもとでは、修正主義は教条主義よりいっそう有害なものである。」(毛沢東「中国共産党全国宣伝工作会议における講話」——一九五七年三月十二日——『毛沢東著作選』一九六七年初版発行。外文出版社。六九九〜七〇〇ページ、傍点引用者)。問題は、レーニンの「プロレタリアートの根本的利益」なり毛沢東の「マルクス主義の普遍的原理」とは具体的にどのようなことをさすのか。それはそんなにむづかしいことではないように思われる。

現代修正主義の特徴は、資本主義世界では帝国主義、植民地主義の支配を擁護し、社会主義世界では資本主義の復活を實行することである(一九六六年第十一号『紅旗』社説「毛沢東思想の道を勝利のうちに前進しよう」参照)。帝国主義段階における修正主義の問題は、政治経済学の領域において、レーニンは帝国主義批判の根本問題に関連してつぎのように言明している。「改良主義によって帝国主義の基礎を変更し得るや否や、吾々は進んで帝国主義から生じた矛盾の激化と深化に努む可きか、それとも退いてその矛盾の調和に努む可きか——是が帝国主義の批判における根本問題である」(青野季吉訳「帝国主義論」『世界大思想全集』③春秋社版、一一〇ページ)。マルクス主義者は、進んで帝国主義の諸矛盾の激化と深化に努力するが、反対に改良主義者はその諸矛盾を緩和、調和さすように努める。上記の帝国主義批判の根本問題の箇所訳文について一言いっておく。宇高基輔訳『帝国主義』(岩波文庫)では、つぎのように訳出されている。「帝国主義の基礎の改良主義的な改変は可能かどうか、事態は帝国主義によってうみだされる諸矛盾のいっそうの激化と深化へむかって前進するか、それともその鈍化へむかって後退するか、という問題は、帝国主義の批判の根本問題である」(一七九ページ)。この宇高訳と青野訳と比較すれば、後者は、「吾々は進んで……努む可きか。」という風に、実践的、革命的に訳されているが、前者は、「事態は……前進するか……後退するか」というように、非実践的、客観主義的に訳出されている。レーニンのこの部分は帝国主義批判の根本問題であるので、このような根本問題に訳文に差異が生じているのは、たんに語学上だけの問題としてかたづけられることのできない重大問題をはらんでいるように思われる。宇高訳と同類のものを二種類あげておこう。その一つは、副島種典訳でこうである。「帝国主義の基礎を改良主義的に改めることが可能かどうか、事態は帝国主義の生み出す諸矛盾のいっそうの激化と深刻化に向って前進するか、あるいはその鈍化に向って後退するかという問題は、帝国主義批判の社会主義社会の過渡期的性格(小野)

根本問題である」(国民文庫一四三(四ページ))。も一つは、『レーニン全集』②訳で、「帝国主義の基礎を改良主義的に改修することが可能かどうか、事態は帝国主義によって生みだされる諸矛盾のいっそうの激化と深化へむかって前進するか、それとも鈍化にむかって後退するか、という問題は、帝国主義批判の根本問題である」(三三二ページ)という風に記されている。念のために、広島定吉訳をあげておこう。広島訳は、レーニンの『帝国主義論』そのものを訳したものでなく、ソ聯邦百科大辞典版『弁証法的唯物論』(新興出版社)における当該部分の翻訳である。こういうように訳されている。「帝国主義の基礎の改良主義的变化が可能なるや否や、進んで、帝国主義の生んだ矛盾をこれ以上激成深化すべきか、それとも退いて、これを緩和すべきかという問題は、帝国主義批判の根本問題である」(一六三ページ)。やはり「進んで……激成深化すべきか、……緩和すべきか」と実践する立場から訳されている。独占資本主義段階の矛盾Ⅱ対立面の統一法則の問題が、帝国主義批判の根本問題なのである。修正主義的思潮は帝国主義にとって有利であるが、帝国主義の行動は、修正主義にとって有利でなく、かえって破産に導くのである。

(3) 日本共産党中央委員会宣伝教育部編『プロレタリアート独裁の歴史的経験について』(新日本出版社、一九六三年三月五日、第八版所収)。

(4) 註3の論文参照のこと。

(5) ハスターリン問題Vについては、第三章で言及するが、中国においてハスターリン問題Vをあつかった論文は、前記の二論文以外に、訳出されているものをあげれば、『国際共産主義運動の総路線についての論戦』(北京・外文出版社)所収の「スターリン問題について」(第二評)である。なお『国際共産主義運動の総路線についての論戦』(今後略して『論戦』という)には合計十論文が掲載されており、これらの論文は中ソ論争に関連して、中国共産党中央委員会がソ連共産党中央委員会に反論として書かれた論文であるが、プロレタリア文化大革命を理解するためにも是非読まなければならない文献である。

(6) 「十月革命の道」とは、十月革命の時間的・空間的条件を別にして、いかなる国にも適用されるにちがいない、マルクス・レーニン主義の普遍的真理であるとして、「十月革命」の基本的性質をつぎのように概括している。

(1) プロレタリアの先進的な人びとが、共産主義政党を組織した。この政党は、マルクス・レーニン主義を自己の行動の指針とし、民主主義的中央集権制にもとづいてうちたてられ、大衆と密接にむすびつき、勤労大衆の中核と

なるようにつとめ、その黨員と人民大衆をマルクス・レーニン主義によつて教育する。

(2) プロレタリアートは、共産党の指導のもとに、勤労人民と連合し、革命的闘争によつてブルジョアジーの手から政治権力をうばいとる。

(3) 革命の勝利ののち、プロレタリアートは、共産党の指導のもとに、労農同盟を基礎にして、広はんな人民大衆と連合し、地主、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの独裁を樹立し、反革命分子の反抗を鎮圧し、工業の国有化を実施し、一步一步と農業の集団化を実現し、こうして搾取制度と生産手段の私有制度を廃止し、階級を消滅する。

(4) プロレタリアートと共産党に指導される国家は、人民大衆を指導して、社会主義経済と社会主義文化を計画的に發展させ、これを基礎にして人民の生活水準をだんだんとたかめ、そして共産主義社会へうつっていくために、積極的に条件を準備し、奮闘する。

(5) プロレタリアートと共産党に指導される国家は、帝國主義の侵略にだんこととして反対し、各民族の平等を承認し、世界の平和を擁護し、プロレタリア國際主義の諸原則をかたくまもり、各国の勤労人民の援助をかちとるようにつとめ、また各国の勤労人民と被圧迫民族を援助するように努力する（註3の論文、二九〜三〇ページ参照のこと）。以上のような概括は、人類社会の發展段階の八特定の段階における革命と建設活動の一般法則である、と当該論文はいっているのである。

(7) 註5であげた『論戦』によつてこのことが了解される。所謂中ソ論争に対して、日本共産党は、中国共産党と同じようにソ連共産党の修正主義的路線を批判し、中国共産党と同調していたように思われるが、両党のその批判の基本的観点なりとりあげ方には、本質的相違があった。この相違が、中国共産党と日本共産党（修正主義党）とのあいだに和解しがたい本質的対立を生みだした。ソ連共産党と日本共産党は、両者とも修正主義党であるが、日本共産党はソ連共産党のあまりにも修正主義的現象がはつきりしているために、ポーズとしてソ連共産党を表面的に批判しているにすぎない。「正統派マルクス主義者」にあつては、ソ連の植民地的立場におかれてゐる東独の諸文献を「マルクス主義」の文献として大いにもちあげる傾向があらわれてきた。

(8) レーニンはプロ独裁の定義については、時と場合によつてかなり異なつた調子の定義を下している。「正統派マルクス主義社会の過渡期的性格（小野）」

クス主義者?」は、自己の見解を合理化するために自分に都合のいいレーニンのつぎのような言明をよく引用するのでそれをあげておこう。「プロレタリア独裁の本質は、暴力一つにあるのでもなければ、主として暴力にあるのでもありません。その主要な本質は、勤労者の先遣部隊、その前衛、その唯一の指導者であるプロレタリアートの組織性と規律とにあるのです」(レーニン「ハンガリアの労働者へのあいさつ」『レーニン全集』②九三九一ページ)。ここで、レーニンは、プロ独裁の主要な本質は、プロレタリアートの組織性と規律である、といっているのである。しかし、レーニンは、また、彼なりに、独裁の歴史を総括した「独裁の問題の歴史によせて」において、「独裁とは法律に依拠するのではなく、暴力に依拠する、無制限の権力を意味する」(『レーニン全集』③三四八ページ)ともいっている。私見によれば、プロ独裁の本質規定についてはつぎの二つの事柄を考慮にいれなければならない。すなわち、第一に、レーニンは年数からいってプロ独裁の実際の経験をあまりもっていないということ、第二に、ロシア十月革命以後現代にいたる各国のプロ独裁の豊富な実践的、歴史的経験を総括をふまえなければならないということ、である。以上の二つの事柄をふまえて、レーニンのいう(一)組織性と規律という側面、(二)暴力無制限の権力の側面を対立的に把握するのではなくて統一的に理解しなければならないと考える。このように考えるのが正しいとすれば、レーニンのいうプロレタリアートの組織性と規律の側面が、プロ独裁の主要な本質であるという規定は、十月革命後の各国の豊富なプロ独裁の歴史的経験からみれば、それは、プロ独裁の一側面であるけれど、主要な本質とはいいがたい。やはり、主要な側面は、レーニンがいつている暴力無制限の権力であって、組織性と規律は、副次的な側面であると考えるのが妥当である。なお、プロ独裁の理論についてはあらためて検討したい。

(9) 「社会主義社会において、とくに生産手段所有制にたいする社会主義的改造が基本的に完成されたのちに、階級と階級闘争がなお存在するかどうか。社会のすべての階級闘争がなお権力争奪の問題に集中されているかどうか。プロレタリアート独裁の条件のもとでも革命をおこなう必要があるかどうか。だれにたいして革命をおこなうのか。どのよう革命をおこなうのか。これら一連の重大な理論的問題は、マルクスとエンゲルスがその当時解決しえなかったものである。レーニンは、プロレタリアートが権力を奪取したのちに、うち破られたブルジョアジーはプロレタリアートよりも強大であることさえあって、四六時中復活をたくらんでおり、同時に小生産者がたえず新しい資本主義とブルジョアジーを生み出して、プロレタリアート独裁を脅かしており、したがって、これらの反革命的脅威に対処し、

それにうち勝つためには、長期にわたってプロレタリアート独裁を強化しなければならず、これ以外に第二の道がないことを見てとっていた。しかし、レーニンはこれらの問題の実際的な解決を待たずに逝去した」(偉大な歴史的文献)『紅旗』編集部と『人民日報』編集部一九六七年五月十八日『人民日報』。当該論文はこう述べた後、スターリンは偉大なマルクス・レーニン主義者であるが、スターリンの欠点は、「プロレタリアート独裁の歴史的時代全体にわたって、社会に階級と階級闘争が存在し、革命のなかでだれがだれに勝つかの問題は最終的に解決されておらず、下手をすれば、ブルジョアジーが復活する可能性があることを、理論的に認めなかったことである」としている。

一 社会主義社会の性格規定把握の意義

「中国革命の対象、中国革命の任務、中国革命の原動力、中国革命の性質、中国革命の前途と転化をはっきり理解するには、中国社会の性質をはっきり理解する以外にない」⁽¹⁾。これは、毛沢東が一九三九年十二月に書いた論文「中国革命と中国共産党」の中でいっている言葉である。毛沢東によれば、「革命のすべての問題」は「中国社会の性質」を深く把握することである。中国社会の性質に対する正確な理解から、中国革命の対象、任務、原動力、性質そして中国革命の前途と転化が規定される。

プロ文革は一部でいわれているように単なる文化革命や人間革命だけではなくて、まず政治革命であり、上部構造の領域における革命である。プロ文革が政治革命であるかぎり、プロ文革の対象、任務、原動力、性質等を解明しなければならぬ⁽²⁾。プロ文革を構成する諸要素(対象、任務、原動力等)を理解するためには、それらの諸要素を規定するところの現代における中国社会の性質(このことは中国社会主义社会の特殊性を通しての社会主义社会一般の性格規定を含む)即ち、社会主義としての中国社会の性質の理論的実践的把握を前提とする。しかし、従来日本における

社会主義政治経済学の研究は、ソ連社会の現状把握を通じての社会主義社会の研究が主流であり、中国社会主義社会の研究は傍流であつて、したがつて社会主義としての現代中国社会の性格規定についての本格的な研究はほとんどおこなわれていないように思われる。⁽³⁾ このことは、日本の社会主義研究のあり方に関連しているようである。日本の社会主義政治経済学研究には二つの特徴がある。その第一は、その研究対象をソ連社会を中心とし、付随的なものとして東欧諸国の社会主義及びアジアにおける中国社会主義などがとりあげられてきた。もちろん、ソ連社会は人類史上最初の社会主義国である関係から、いわば「理想型」⁽⁴⁾としてソ連社会主義社会が研究対象になつたことは十分了解される。しかし、今日の段階では、中国のマルクス主義者の規定にしたがえば、ソ連社会には「資本主義が復活」⁽⁴⁾し、ソ連は、「社会帝国主義国」であり、東欧諸国（アルバニアを除く）の社会主義国は「修正主義国」⁽⁵⁾（つまり資本主義国）に変質してプロレタリア階級とブルジョア階級の階級対立が存在し、ユーゴヤルーマニアを除くこれらの諸国は、ソ連社会帝国主義の植民地、従属国としてソ連の勢力圏にくみいれられているのである。ソ連社会中心の社会主義政治経済学研究のあり方を再検討しなければならぬ。従来中国社会主義政治経済学研究には後進国アジアを軽視するという意味を含めての近代主義的傾向がある。日本の社会主義経済学の研究者に、もしこのような傾向があるとすれば、その思想的危機は深刻である。日本の社会主義経済学研究の第二の特徴は、マルクス・レーニン主義の古典の規定（プロ独裁についての古典の規定にはあまりふれられない）を基礎におきながら、現実の社会主義——主にソ連社会が中心である——が提起する理論問題を媒介に、社会主義経済理論が再構成された。このようにして形成された社会主義経済理論が正統派であつて、アジアの社会主義中国で形成された社会主義経済理論は、前述のような正統派的基準でもつて批判されるのが現状である。⁽⁵⁾ 所謂「中ソ対立」⁽⁵⁾は、マル

クス主義の普遍的真理を断固堅持する中国とそれを否定するソ連修正主義との対立に主に起因しているのであるが、△中ソ対立▽の主たる原因は、「資本主義から共産主義への過渡期」というばあいの、「共産主義」を高い段階の共産主義をさしているのか、それとも社会主義といわれる低い段階の共産主義をさしているのかという理論上の解釈の相異点にあるという見解がある。⁽⁶⁾レーニンは、マルクス主義の「真髓」と「生きた魂」は、「具体的事物の具体的分析にある」といった。△中ソ対立▽の原因は、上記のようなマルクスの古典的命題のたんなる文義的解釈上だけの理解の相違ではない。誤解をおそれずにあえていえば、社会主義社会の具体的状況を具体的に分析した結果、個々の古典的命題に実状がそぐわない場合には、マルクス主義の普遍的原理（もちろん、この普遍的真理も実践のなかでたえず検証されなければならない）が貫徹しているかぎり、マルクスやエンゲルスそしてレーニンの個々の古典的命題を修正ないし無視してもさしつかえないのである。レーニンが具体的状況にたいする具体的分析が、マルクス主義の真髓であるといっているのは、マルクスやエンゲルスの個々の命題を現実に適用、あてはめることではない。これは教条主義である。レーニンなどの著作には、マルクス・エンゲルスの古典からの豊富な引用があるが、その場合、具体的状況の具体的分析を媒介にしているので、それらの古典的引用は生命力あるものとしてとりあげられている。階級闘争の傑出した指導的な担い手であるレーニンなどは、現実の生き生きとした革命運動の中で、マルクス主義の古典的規定が迫力をもって身近に接近してくるのである。レーニンとともに今世紀における傑出した革命家、毛沢東もレーニンと同様である。毛沢東も、唯物弁証法の基本的観点をお徹底的につらぬきとおしながら現代世界の基本矛盾なり、社会主義社会の現状分析をおこなっている。⁽⁸⁾例えば、プロ文筆は、マルクス・レーニン主義の従来の古典的基準からすれば、型破りである。しかし、型を破ることで

思想なり理論が発展する。前衛党内部の反社会主義的な党員が地位の上下の如何にかかわらず人民大衆の批判に大衆運動として公然とさらされることなどは、前衛党組織論のレーニンの原則からはずれているようにみえる。

〔レーニンも、前衛党が前衛党でなくなったとき、党員大衆が規律違反によって、分派行動をおこなうことを認めている。〕ドイツ社会民主党のなかでやられている誠実なこと、真に社会主義的なことはすべて、党中央部にそむいて、党中央委員会と党中央機関紙を避けてやられており、組織上の規律に違反してやられており、たとえば本年五月三十一日づけの『ベルナ・タークヴァハト』に発表されたドイツの「左派」の檄が匿名であったように、新しい党の新しい匿名の中央機関の名において分派的にやられているのである。レギーン・ジュデクム・カウツキー・ハーゼ・シャイデマン一派の古い、腐敗した、国権の自由主義的な党ではなくて、新しい党、真に労働者的な、真に革命的な社会民主主義的な党が、実際に成長し、つよくなり、組織されつつあるのだ（レーニン「第二インタナショナルの崩壊」『レーニン全集』④大月版、一四八ページ）。真正のマルクス主義の政治路線と思想路線がさきでありきで、組織がさきでありきではない。党組織を形式主義的に第一に優先さすような思想は、レーニンにはなかった。あくまで、思想・政治の先行が必要である。ここで一言すれば、政治というものは、決して主観的なものではないということである。階級社会であるがぎり、政治上では、かならず、人間の集団のなかに、左翼・中間、右翼、極左、極右等々の諸潮流が存在するが、このことは、人々の意志ではどうすることもできないまったく客観的な事柄である。左翼とは何か、右翼とは何か、等々は、客観的かつ具体的な階級基準によって決定されるのである。恣意的にきまるものではない。戦前・戦後を通じて現在まで、日本のマルクス主義では、真の意味の生き生きとした客観的で正確な階級分析がなかったのではないか。このことが、人々をして、政治といえは、主観的なもので、手練手管を弄するものと思わせ、忌避させるようにせしめたのではないか。現在でも、たしかに、このような現象が存在する。生き生きとした厳格な階級分析のないところでは、政治は、恣意的となり、手練手管にならざるをえない。生きた階級分析ぬきに社会主義を語ることはできない。毛沢東は熾烈な現実の革命闘争のなかで中国社会の階級分析的に確におこない、中国の新民主主義革命を成功に導いた。そして、また、社会主義としての中国社会の階級構成の特殊性を見事に分析し、プロ文革を成功に導いた。

生き生きとした具体的で客観的で正確な階級分析は革命成功の必要条件である。毛沢東の階級構成の分析のみならず、国内外の情勢分析の正確さとの確さについては、つぎのような典型的な事例によって我々はそれを知ることができる。即ち、一九四五年（昭和二〇年）四月延安で開かれた中国共産党第七回大会で、毛沢東がおこなった政治報告『連合政府論』と同じ日、同大会で第三番目に日本共産党を代表して演説した野坂参三の『民主的日本の建設』とを対比すれば、毛沢東の情勢分析が野坂のそれよりいかに正確であったかは一目瞭然である。

ましてレーニン死後のソ連流に理解されたかなり形式的に硬直した党組織論の基準からすればなおさらそうである。人民大衆による反人民、反社会主義的な共産党員批判と打倒は、共産党が人民のために真に奉仕する党として「整党」されるだけでなく、なによりも重要なことは、そうした大衆運動によって社会主義社会の主人公である労働者、貧農、下層中農をはじめとする人民大衆が真実生き生きとした主人公として解放され、それによってプロレタリア独裁の基礎が、いっそう強固になるのである。

プロレタリア文化革命は政治革命であり、「プロレタリア階級独裁の下における革命」である。したがって、それが政治革命であるかぎり、国家権力の問題である。それ故、プロ文革は、それがよってたつ基盤である社会主義社会の性格規定に依存している。社会主義社会の性質についての研究がプロ文革理解の大きな鍵である。そこで本稿では毛沢東が大きく貢献しているとみられる中国の社会主義学説の検討を經由しながら社会主義社会の歴史的性格について若干の考察を試みることである。私の研究の視点は、マルクス、エンゲルスそしてレーニンの個々の古典的命題から毛沢東理論を検討することではない。そうではなくて、プロ文革が提起した実践的、理論的問題を基準に、そして中国革命と中国人民の解放思想であるところの毛沢東思想を基準に、もっと重要なこととは、変革の革命の対象となるべき現代世界の歴史的経験（唯物弁証法ではこれを現代世界の四大矛盾として把握して

いる)の中で位置づけられる社会主義社会の歴史的現実を基準に、マルクス主義の基本的原理なり個々の古典的規定の従来を反省し、深く理解しなおすことである。

中国では毛沢東思想はつぎのように評価されている。毛沢東思想は、中国各民族人民の新民主主義革命(新民主主義革命においては、その革命の性質はブルジョア民主主義的性質であるが、政権の階級の実質は、プロレタリア階級が指導する反帝反封建の革命的諸階級の連合独裁である。前者は、革命の社会経済的内容であるが、後者は政権の階級の実質をさしている。政権の性質を決定する基本的要素は、いかなる人間がその権力に参加しているかどうかということではなくて、いかなる階級が指導し、いかなる階級がそのなかで決定的役割をはたし、その政策と法令がいかなる階級の意志を反映し、いかなる階級の利益に奉仕しているか、ということである)や中国の社会主義革命と社会主義建設のなかで、そして現代の国際共産主義運動のなかで、そして、帝国主義、現代修正主義、および各国反動派に反対する闘争のなかで、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を革命の具体的実践と結びつけ、政治、軍事、経済、文化、哲学などの各分野で、マルクス・レーニン主義をまったく新しい段階に高めた、と。要するに毛沢東思想は所謂マルクス主義の三つの構成要素(三要素はきりはなすことのできない有機的関連をもっている)である社会主義学説、哲学、経済学等の各部門においてレーニン主義を新段階に高めたと評価されているのである。毛沢東思想が、このように社会主義学説、哲学、経済学等の構成諸要素から主になりたつていとすれば、本稿でとりあげようとする問題は、すなわち、社会主義社会の過渡期的性格についての問題は、社会主義学説と経済学に直接かわる部分である。中国では、社会主義社会の過渡期的性格の規定についての理論は、社会主義学説と経済学に直接かわる部分である。中国では、社会主義社会の過渡期的性格の規定についての理論は、社会主義学説と経済学に直接かわる部分である。

(1) 『毛沢東選集』第二巻、一九六七年、人民出版社第五九六頁。邦訳『毛沢東選集』第二巻、一九六九年三月五日初版、外文出版社、四二四ページ。

(2) 図式的に言えば、プロレタリア階級独裁下の革命の対象は、「資本主義の道を歩む党内の実権派」であり、その任務は、プロレタリア文化大革命をおこなうことであり、そしてプロ文革の担い手は、労働者階級・貧農・下層中農、人民解放軍、革命的知識人である。プロ文革の性質は「人びとのたましいに触れる大革命であり、人びとの世界観の問題を解決する」革命である。

(3) 藤村俊郎氏や菅沼正久氏等々の研究がある。

(4) 『論戦』所収の「フルシチョフのニセ共産主義とその世界史的教訓」(第九評)参照のこと。この第九評は毛沢東がかなり手をいれてきたものといわれている。

(5) これと同じような問題性についての指摘として藤村俊郎「過渡期階級闘争の理論と毛沢東思想」(『思想』一九六八年一月号)がある。

(6) 木原正雄・高昇孝『現代の社会主義』(一九六九年四月一日青木書店)がこのような見地である。

(7) 『レーニン全集』③大月版、一五六ページの『共産主義』の中でいっている言葉。

(8) 『論戦』所収の「フルシチョフのニセ共産主義とその世界史的教訓」の第七節「プロレタリアート独裁の歴史的教訓」の中で、社会主義社会の分析は、まず唯物弁証法のもっとも根本的な法則である対立面の統一の法則にもとづかなければならないことを説明している。「毛主席の、プロレタリア階級独裁のもっともひきつづき革命をおこなうことについての語録」(一九六九年三九号『北京周报』)は、非常にすぐれた構成に編集されているが、ここでも、「マルクス・レーニン主義の対立面の統一の法則で社会主義社会を観察する」項が冒頭にすえられ、この見地から社会主義社会を分析したところ「社会主義社会には、階級、階級矛盾と階級闘争が存在している」ことが発見され、それが社会主義社会の性格を形成する。「プロレタリア階級独裁下の階級闘争は実質的には依然として権力の問題である」(第三項目)として、社会主義社会下の階級闘争の問題がより具体的に把握されている。これにもとづいて、プロレタリア階級独裁下における革命の対象、任務、原動力、性質が毛沢東の言葉によって語られている。

二 所謂「過渡期階級闘争理論」の形成

プロ文革の構成諸要素（対象・任務・原動力・性質等）を把握する基本的前提として、中国社会主義社会の特殊性を把握することの重要な意義について前章で言及した。本章では、中国における社会主義社会の過渡期的性格の認識である△過渡期階級闘争理論▽が、中国の社会主義革命と社会主義建設の実践的深まりの中で、どのように形成されていったのかを、即ち中国において社会主義社会の過渡期的性格に対する認識がどのように深化発展していったのかを追跡することである。

一九五六年という年は、今からみると中国にとっては、生産手段の所有制の社会主義的改造が基本的に達成されたという重大な年であるとともに、ソ連方式の社会主義建設から独自の方式による社会主義建設への転換の年でもあった。ソ連社会との比較でいえば、丁度ソ連の一九三五～六年の時期に対応する。スターリンは一九三六年十一月二十五日の「ソヴェト憲法草案について」において、「人間による人間の搾取が根絶され、一掃されて、生産用具と生産手段の社会主義的所有が、わがソヴェト社会のゆるぎない基礎として確立されたことを意味する」と述べ、△階級闘争消滅論▽を主張した。搾取階級は消滅し、労働者階級、農民階級およびインテリゲンツィアのあいだの階級的差異も縮少し、経済的、政治的矛盾も消滅しつつあると、スターリンは分析したのである。一九三六年のスターリン憲法は、選挙法を改正し、民主主義の基盤を拡張し、市民の基本権の保障に留意したといわれているのであるが、現実には、社会主義財産の侵犯事件の続発、反革命事件、トロッキスト等の政治的反对があり、それに対応して、刑事法令、手続法令の峻厳化、懲罰制度の強化という事態が生ずる。それに内務省

特別會議の設置（裁判をへずして一遍の行政裁判で人を五年の流刑に処せられる）や即時処刑という刑事訴訟特別法の制定などは、反革命分子（ブハーリン、ジノビエフ、カマーネフ、トハチエフスキーら）に対する一九三七～八年の大粛清に適用されるのである。スターリンの「階級闘争消滅論」の論理的帰結は、階級闘争消滅宣言をだした後、多発化する反革命分子（スパイト・トロッキスト等）の発生を国内にその発生を階級的基盤があるものとして把握せずに、国際帝国主義の「手先」として規定したところにあらわれる。この点については第三章社会主義社会の過渡期的性格と「スターリン問題」のところで論じることにしてしよう。

中国は、生産手段所有制の社会主義的改造が実現した後、中国社会の階級構成をどのように分析したのか。スターリン理論にしたがえば、階級、階級矛盾と階級闘争の存在を認めないことになる。実際に、一九五六年九月十五日ひらかれた中国共産党第八期全国代表大会（略して八全大会という）における劉少奇の政治報告は、だいたいいにおいてスターリン・テーゼの線にしたがったものであった。劉少奇の政治報告の「決議」（一九五六年九月二七日採択）はつぎのような認識をもっていた。「げんざい、このような社会主義的改造はすでに決定的な勝利をおさめており、これは、わが国のプロレタリアートと資本家階級とのあいだの矛盾がほぼ解決され、数千年にわたる階級的搾取制度の歴史が実質的におわりを告げ、社会主義の社会制度がわが国で基本的にうちたてられたことをしめしている。」そして「いまやわが国内のおもな矛盾は、すすんだ工業国を建設しようとする人民の要求と、おくれた農業国であるという現実とのあいだの矛盾であり、経済、文化の急速な発展にたいする人民の要求と、いまでもまだ経済、文化が人民の要求をみたすことのできないという現状とのあいだの矛盾である。この矛盾の本質は、わが国で社会主義制度がすでにうちたてられたという事情のもとでは、とりもなおさず、すすんだ社会

主義制度とおくれた社会の生産力とのあいだの矛盾である。」（第八回全国代表大会にたいする中国共産党中央委員会の政治報告）外文出版社、一三三—一三五ページ。傍点引用者。劉少奇「政治報告」の生産手段所有制の社会主義的改造後の時点での現状認識の特色は、階級闘争消滅の主張であり、したがって国内的矛盾の本質は、 \wedge すすんだ生産関係 \vee と \wedge おくれた生産力 \vee の矛盾であるという点である。このような現状認識からは、ただ生産力を発展させることが最重要な課題であるという修正主義的見地しかでてこない。階級闘争消滅論という点では、スターリンと劉少奇は理論上の共通性をもっていたが、両者の相違は、前者は、プロ独裁を理論上はともかく、実践上では堅持したが、後者は、それを否定したことである。

他方、毛沢東は、「八全大会」の翌年の一九五七年二月二十七日付の論文「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」（以後「人民内部の矛盾」と略称す）において、社会主義社会においては、「敵味方の矛盾」と「人民内部の矛盾」という性質の異なる二種類の矛盾が存在するという問題提起をおこない、「敵味方の矛盾」よりも、とくに「人民内部の矛盾」に重点をおいて分析している。従来日本では、『人民内部の矛盾』の論理がそういう構造になっているからやむを得ないが、『人民内部の矛盾』の理解の仕方は「人民内部の矛盾」分析を中心に理解されていたように思われる。したがって、「敵味方の矛盾」についてはあまり問題にされなかった。しかし毛沢東にあっては、「敵味方の矛盾」という敵対的な矛盾関係は前提されておいて、社会主義社会には決して「敵味方の矛盾」は消滅したとはいっていないのである。たとえ、人民内部の矛盾にしても、人民内部に理論上、政策上の対立が生じた場合、真理は一つであるから、いずれかの意見が真理を代表し、社会を前進さす思想であり、他のいずれかの意見はまちがっており、社会を後退さす思想である。そして、この処理をあやまれば、敵対

的矛盾に転化するのである。劉少奇政治報告の階級的搾取制度は消滅し「敵味方の矛盾」はなくなったという把握とは非常に異なっているのである。「人民内部の矛盾」において、毛沢東は、社会主義社会の「階級闘争の法則」を解明したさいつぎのようになっている。「わが国では、社会主義的改造が、所有面では基本的になしとげられ、革命の時期における大規模の、あらゆるような大衆的階級闘争は基本的に終りをつけたが、しかし、くつがえされた地主・買弁階級の残存分子はまだ存在しており、ブルジョアジーもまだ存在しており、小ブルジョアジーはやっと改造されはじめたばかりである。階級闘争はまだ終わってはいない。プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる、曲折したたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。プロレタリアートは自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとするし、ブルジョアジーも自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。この面では、社会主義と資本主義とのあいだの、どちらが勝ち、どちらが負けるかという問題は、まだほんとうには解決されていない」。(2) 毛沢東の所謂「社会主義的改造」後の社会におけるこのような階級闘争の法則についての考え方は、八全大会の劉少奇「政治報告」の「階級闘争消滅論」を根本から否定するものであった。プロ文革において誰の眼にもはっきりとうつしだされた毛沢東路線と劉少奇路線の理論上、実践上の二つの敵対的対立の萌芽形態をここにみてとることができる。毛沢東はこの時点で少数派であったようである。しかし、劉少奇は、一九五八年五月五日の中国共産党第八期全国代表大会第二次会議における「中国共産党中央委員会の活動報告」の中で、八全大会の政治報告の考え方を若干修正している。すなわち、「整風運動と反右派闘争の経験がふたたび示しているように、過渡期のぜんたいをつうじて、つ

まり、社会主義社会がうちたてられるまでは、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争、社会主義の道と資本主義の道との闘争が終始わが国内部のおもな矛盾であります。この矛盾は、ある部面では激烈な、生死にかかわる敵味方の矛盾となつてあらわれるのでありまして、ブルジョアジーの右派が一九五七年におこなつた攻撃中にあらわれたものがすなわちそれであります。」(傍点引用者)。社会主義社会がうちたてられるまで、過渡期をつうじて、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争、社会主義の道と資本主義の道との闘争が国内の主要な矛盾であるという把握である。一九五七年春から毛沢東の『人民内部の矛盾』を指導的思想に、官僚主義、セクト主義、主観主義の克服をめざして、党内整風運動と党外の整風運動とが展開されるが、この機会に乗じて、民族ブルジョアジーの右派が中心になり、プロレタリアート独裁に対する反対運動をかなり強力におしすすめるのである(例えば、固定利子の永久化の要求、公私合営企業からの共産党の脱退要求等熾烈をきわめる)。このような状況のなかで、五七年七月一日、毛沢東は、自ら『人民日報』に「文匯報のブルジョアの傾向を批判すべきである」と題する社説を書き、反右派闘争を激励した。労働者、農民をはじめ人民大衆が、プロレタリアート独裁と中国共産党を擁護し、反右派闘争にたちあがった。劉少奇の中央委員会報告にある「整風運動と反右派闘争の経験が……」といっているのは、このような事態をさしめしているのである。一九五三年から開始された第一次五カ年計画は、一九五七年に超過達成された。この反右派闘争と党内の整風運動をふまえて、第二次五カ年計画がはじまる。これによりさきに、毛沢東は、中国の第一次五カ年計画(五三―五七年)の経験を分析そして総合して、一九五六年「十大関係」論を提起し、「大いに意気どみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設する」という思想をうちだした。そして、それは五八年五月には中国共産党第八回全国代

表大会第二回會議で、社会主義建設の総路線として正式に採択された。一九五八年に、所謂大躍進政策——社会主義建設の総路線、人民公社運動、大躍進——すなわち三面紅旗の新しい方針がうたがされる。大躍進政策Ⅱ三面紅旗の新方針こそ、生産手段所有制の社会主義的改造後、中国社会主義が、これまでのソ連型の社会主義建設方式のモデルから脱却して独自の道（人民大衆の「主観能動性」⁽³⁾）を基礎にした大衆運動によって社会主義建設をおこなう方法）を歩む第一歩であった。それ故、それだけ大躍進政策は多くの欠陥を露呈せざるを得なかった。⁽⁴⁾しかし、人民大衆（労働者、貧農、下層中農をはじめとする勤労人民）の主観能動性に依拠した大衆運動で上部構造と経済的土台をふくむ一切の社会的諸関係をいっそう深く変革し、社会的生産力の基本的な担い手である人民大衆を真に政治的、思想的、経済的に解放しようとする三面紅旗の新方針は、当然、このような方針に反対する修正主義的な保守的勢力と対決せざるを得ないのであり、それが問題をよりいっそう深刻化たらしめたものは中国共産党内部にそれが反映したことである。中国共産党内部における、ソ連流の共産党幹部や科学・技術者を重視した社会主義経済の「近代的」管理の方式を社会主義建設の主要な方法と考える勢力と人民大衆の主観能動性に依拠して、社会主義建設に人民大衆をおもいきりたちあがらせるという毛沢東流の考え方と真向から対立せざるを得ない。この両者の社会主義建設をめぐる対立は政策上の対立であって、たんなる見解の相違ではない。社会主義建設の方法をめぐる理論上のたんなる対立ではなくて、社会主義建設における二つの路線の相違であった。実践的な階級闘争という敵対的な性格をおびた対立であった。彭徳懷らは、「視察」、「調査」をおこない、総路線、大躍進、人民公社運動における一時的、部分的な欠陥を誇張してあげつくろい大躍進政策をつぶそうとした。彭徳懷らは、総路線を、「『左翼』冒険主義」だとか、大躍進を「のぼせあがっている」、「高熱にうなされている」

とか、人民公社は、「早すぎた」、「めちゃくちゃになっている」とかいつて攻撃した。また、何億という人民大衆の大衆運動を「小ブルジョア階級の熱狂性」だといったりもした(『中国共産党の二つの路線の闘争史—資料概略—』中国通信社八一ページ)。所謂廬山会議(一九五九年八月)において、両者の対立は頂点に達した。毛沢東は、廬山会議の意義をつぎのようにのべている。「廬山にあらわれたこの闘争は、階級闘争であり過去十年の社会主義革命の過程における、ブルジョア階級とプロレタリア階級という敵対しあう二大階級の生死をかけた闘争の延長である」と。中国共産党第八期中央委員会第八回総会(一九五九年八月の廬山会議のこと)における彭德懷国防部長の解任事件は、このことを象徴的に表現したものであった。一九五九年十七号『紅旗』社説は、「事實はやがて第八期中総会がわが国の社会主義建設の時期における重要な歴史的意義をもつ会議であったことを証明するであろう」とのべたのである。事實はまさにそのとおりになった。プロ文革で打倒の対象になった呉晗は、同年『海瑞、皇帝を罵る』(海瑞は彭德懷で、皇帝は毛沢東の比喩であるといわれている)を発表し、六一年に『海瑞の免官』を書いている。彭德懷国防部長解職の後、国防部長に就任したが、現在批林批孔運動において批判されている林彪である。大躍進政策それ自体がもつ内在的欠陥はともかくとして、大躍進政策の重大な阻害要因となつた外部的原因の一つは、一九五九年下半年から六一年にかけての三年連続の自然災害であり、他の要因は六〇年のフルシチョフ修正主義の背信的な経済技術援助の打ち切りと、朝鮮戦争における戦費借款の支払要求であった。このことは一面で第二次五カ年計画の調整をよぎなくし、中国経済に重大な支障をきたしたのである。が、消極的側面は、一定の条件の下では、積極面に転化する。このことは、人民大衆の発奮を促した。ソ連の経済技術援助の打ち切りと三年連続の自然災害による中国の国民経済の困難に対して、毛沢東路線が採用した解決方法は、人

民大衆に依拠し、自力更生を基礎に、工業、農業の各部門において大いに大衆運動をくりひろげることであった。この時期に、毛沢東は、有名な「鞍鋼憲法」（一九六〇年三月）により、社会主義企業経営の原則を指示したり、「全党をあげて、農業を大いにおこそう」という呼びかけを全国の人民におこなっている。一九六一年一月、第八期中央委員会第九回総会において、この経済的困難な時期にあらわれた複雑にして先鋭な階級闘争に対応して、全国的規模で、何回かにわけて整風運動をおこなうこと、総路線、大躍進、人民公社の所謂三面紅旗の政策は、中国の実情に適合していることを認めた。廬山会議で、毛沢東が提起した「農業を基礎にして工業を導き手とする」国民経済発展の全般の方針をつらぬき、農業戦線を強化することが、この総会で決定された。論者によっては、「農業を基礎にして工業を導き手とする」この理論を「農業基礎論」として特殊化して規定しているが、農業はあらゆる社会形態を通じて人間生活の基礎であることは、すでにマルクスによって指摘されているのであり、毛沢東は、マルクスのこの思想を受けつぎ、社会主義的拡大再生産の問題としてマルクスのこの思想を具体化したのである。総会は、同時に、国民経済に対して「調整、強化、充実、向上」の方針を提起した。かくして、短期間のうちに経済調整は終了し、一九六三年から国民経済は新しい局面をむかえるのである。大躍進政策のもつ諸欠陥、三年連続の自然災害、ソ連の経済技術援助打ち切り等は、国民経済発展に大きな困難をもたらし、階級的諸矛盾が表面化し、階級闘争が中国の各地の各部門に噴出する外的要因を形成した。こういう条件の中で、劉少奇の所謂「三自一包」政策がでてくるのである。これは経済的土台に経済戦線における階級闘争の一環としてのあらわれであった。

一九六二年という年は、毛沢東路線と劉少奇路線という二つの路線の深刻な対立の年であった。生産手段所有

制の社会主義的改造後、中国共産党内部において集中的にあらわれた最大のかつ第一次の政治闘争が五九年の彭徳懐事件であるとすれば、第二次の「戦役」である政治闘争がおこなわれたのは一九六二年であった。中国共産党第八期中央委員会第十一回総会（一九六六年八月）を召集した毛沢東は、総会の席上で、「司令部を砲撃しよう」という「大字報」（壁新聞）を発表した。すなわち「全国最初のマルクス・レーニン主義の大字報と人民日報評論員の評論は、なんととりっぱに書かれていることだろう。同志のみなさん、この大字報とこの評論をもう一度読んでもらいたい。ところが、この五十余日の間に、中央から地方にいたる一部の指導的同志は、これと正反対のことをおこない、反動的なブルジョアジーの立場に立って、ブルジョアジー独裁を実行し、プロレタリアートのすさまじい文化大革命運動をおさえてしまい、是非を転倒し、黒白を混同し、革命派を包囲討伐し、異なった意見をおさえつけ、白色テロをおこなって、自分は得意顔をし、ブルジョアジーの威光をあげ、プロレタリアートの志気をおとろえさせた。これはまたなんと悪らつなことだろうか！ 一九六二年の右翼的偏向や、一九六四年の形は『左』だが実は右の誤った傾向と関連させてみると、それは深く考えさせられることではないだろうか」（傍点引用者）。毛沢東自身が書いたこの「大字報」の中でいっている「一九六二年の右翼的偏向」や「一九六四年の形は『左』だが実は右の誤った傾向」とは具体的に何をさすのであろうか。プロ文革で「資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派」として規定された「ブルジョア反動路線」である劉少奇路線の誤った右翼的傾向をさすのである。

第三期全国人民代表大会第一回会議（大会は、一九六四年十二月二十一日から始まった）で、政府活動報告をおこなった周恩来総理がつぎのようにいっているのは示唆的である。「一九五九年から一九六二年にかけて、わが国

の経済が一時的な困難にぶつかり、帝国主義、各国反動派、現代修正主義がたびたび反中国カンパニアをまきおこしたという状況のもとで、国内の階級敵はまたもや社会主義に攻撃を加え、またもや、はげしい階級闘争が展開された。当時、少なくない人びとが、国内問題では、「三自一包」(自由地をできるだけ多く残し、自由市場をできるだけ多く設け、独立採算制の企業をできるだけ多くつくり、農業生産の任務を一戸ごとに請負わせることを指す)、「単独でやろうという傾向」(単独経営の経済を復活させることを指す)、「自由化」、「以前の処分をくつがえそうとする傾向」および統一戦線の面での降伏主義をさかんに吹聴した。また国際問題では、「三和一小」(帝国主義・反動派・現代修正主義には妥協的態度をとり、各国人民の革命闘争には支援をへらすことを指す)を大いに宣伝した(傍点引用者)。

一九六二年にあらわれた右翼的傾向とは、周恩来報告にあるような「三自一包」とか「単独でやろうという傾向」等々をさししめすのであろう。このことは、「一九六二年、毛沢東同志は党の八期中中総において情勢、矛盾、階級および階級闘争について演説をおこない、ブルジョアジーと党内におけるその代表者が単独経営の風を吹きおこしたことを批判し、右翼的傾向をただした」と、一九六六年第十一号の『紅旗』社説がのべていることから推測される。「重大な歴史的意義をもつ」といわれる北戴河の中央工作會議(一九六二年八月)と第八期中央委員会総会第十回総会(一九六二年九月二十四日から二十七日まで北京で開催される)は、このような情勢の中でひらかれるのである。

中共第八期中中総は、以上のべたような三面紅旗の実践の結果を直接的な媒介にして、中国社会主義社会の歴史的過渡期的性格についてつぎのような具体的な規定をあたえたのである。「プロレタリア革命とプロレタリア独裁の全歴史的時期において、資本主義から共産主義にいたる全歴史的時期において(この時期は、数十年あるいは

もつと多くの時間を必要とする）、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの階級闘争が存在し、社会主義と資本主義のこの二つの道の闘争が存在する。くつがえされた反動支配階級は滅亡に甘んぜずに、彼等は総じて復活を企図する。同時に、社会にはブルジョアジーの影響と旧社会の習慣の勢力が存在し、一部の小生産者の自然発生的な資本主義の傾向が存在する。このために、人民の中には、いまだ社会主義的改造を受けられない若干の人が存在するが、彼等の人数は多くはなく、ただ人口の数パーセントを占めるにすぎないけれど、機会さえあれば社会主義の道を離れて資本主義の道を歩むことを企てる。このような状況の下においては、階級闘争は不可避免である。これはマルクス・レーニン主義がはやくから明らかにしていた一つの歴史法則であり、我々は決して忘れてはならない。このような階級闘争は錯綜し複雑であり、曲折し、時に起伏があり、時にははなはだ激烈でさえある。このような階級闘争は、不可避免的に党内に反映してこざるを得ない。国外の帝国主義の圧力と国内のブルジョアジーの影響の存在が、党内に修正主義思想の生まれる社会的根源である」（『紅旗』一九六二年第十九期第四頁）。そして八期中総はつづけていう。「国内外の階級敵に対して闘争をすすめると同時に、我々は党内の各種の右翼日和見主義的な思想傾向に対して随時警戒しかつあくまでも反対しなければならぬ。一九五九年八月廬山で開催された八期八中全会の重大な歴史的意義は、右翼日和見主義すなわち修正主義の攻撃を勝利のうちに粉碎し、党の総路線と党の団結を擁護したところにある」。八期中総の社会主義社会の過渡期的性格規定は、一九六三年の「社会主義教育運動」の直接的な理論的根拠になったものである。そして、この「社会主義教育運動」がプロレタリア文化大革命を準備したのである。十中総会のこの命題の特色は、第一に社会主義から共産主義（無階級社会）への移行の期間は、数十年あるいはそれ以上の時間を要すること、第二にこの長期間にわたって

敵対的矛盾の性質をもつ階級闘争が存続すること、第三にこの階級闘争は、「錯綜」し「複雑」で、「曲折」し「起伏」があり、「激烈」であり、そしてそれは不可避免的に共産党内部に反映せざるを得ないという階級闘争の発現形態の問題である。『人民内部の矛盾』とそれと同程度に重要な文献と思われる『中国共産党全国宣伝工作会議における講話』（一九五七年三月十二日、以後『講話』と略す）における基本的な考え方を、所謂「社会主義的改造」後の中国社会主義革命の実験的経験を媒介によりいっそう具体的に理論化したのが、十中総会の「過渡期階級闘争理論」である。『人民内部の矛盾』においては、「社会主義的改造」後の社会主義社会の階級闘争の法則の特徴として政治闘争と思想闘争とがとくに強調されているため、経済的諸関係の領域における経済闘争が無視されているような批判があるがそれは誤解である。マルクス・レーニン主義の創始者達は、おかれている歴史的、具体的諸条件の中で当面の重大な危険と思われる諸傾向に対決するために、ある側面を非常に一面的と思われるほど強調している。例えば、マルクスの時代にあつては、当時、哲学上の主要な危険性は、形而上学的、機械的唯物論であつたので、唯物論一般の強調ではなくて、弁証法的側面を特殊的に強調したり、経済学では、古典派経済学の階級闘争の形而上学的観点に唯物史観を対置し、史的側面を前面にだし、俗流経済学の階級闘争の観念論的解釈に対しては、唯物論的側面をとくに強調している。

毛沢東の『講話』をみればわかるように、社会の経済的土台を形成する生産諸関係の総和Ⅱ経済的構造の領域における「社会主義革命」の堅持を主張しており、社会主義社会の下での階級闘争を政治闘争と思想闘争に限定して⁽⁵⁾いない。上部構造を経済的土台から説明するという唯物史観の一般的公式が前提された上で、生産手段所有制の社会主義的改造後の社会では、ことに上部構造における階級闘争である政治闘争と思想闘争の重要性が指摘

されているのである。「講話」のそれを叙述している部分を念のため記しておこう。「あたらしい制度がひとつたびうちたてられると、それでもう完全にかたまつたと考えてはならない、そんなことは不可能である。一步一步かためていかなければならない。それを最終的にかためるには、国家の社会主義的工業化を実現し、経済戦線での社会主義革命を堅持しなければならず、また、政治戦線、思想戦線で、たえまのない、ひじょうに困難な、社会主義革命の闘争と社会主義教育をおこなわなければならない。このほか、さらに、いろいろな国際的条件が呼応することが必要である。わが国では、社会主義制度をかためるたたかい、社会主義と資本主義のどちらが勝つかのたたかいは、まだかなり長い歴史的時期をへなければならぬ。」⁽⁶⁾(傍点引用者)。毛沢東はここですでに所謂「過渡期階級闘争理論」の基本思想を語っているのである。

一九六三年にはいると、「中ソ」両共産党の論戦が公然と展開される。中共中央は「国際共産主義運動の総路線についての提案」(一九六三年六月十四日、ソ連共産党中央委員会の一九六三年三月三十日付書簡に対する返書)、つづいて「第一評」といわれる「ソ連共産党指導部とわれわれの意見の相違の由来と発展」(一九六三年九月六日)が発表され、その後、第九評「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」(一九六四年七月十四日)を最終論文として合計十論文がやつぎばやに発表された。中ソの論戦は最高潮に達した。丁度この時期に、プロ文革の前史となった「社会主義教育運動」がおしすすめられるのである。毛沢東は一九六七年二月に「社会主義教育運動」の限界をつぎのように指摘している。「これまで、われわれは農村での闘争、工場での闘争、文化界での闘争をおこない、社会主義教育運動をすすめてきたが、しかし、問題を解決することができなかった。なぜなら、公然と、全面的に、下から上へと広範な大衆をたち上げらせて、われわれの暗い面をあばきだすようなひとつの

形態、ひとつの方式を見つけたせなかったからである。「暗い面」をあばきだすひとつの方式、形態がプロ文
革であった。「社会主義教育運動」についてはその実態を知る材料がないので実態を知ることはできないが、公
式文書として「当面の農村活動のいくつかの問題についての中国共産党中央委員会の決定(草案)」(一九六三年五
月二〇日公布、一九六六年八月十二日第八期第十一回総会で採択。以後「草案」と略す)があるので、これによってその
基本的な思想を把握することができる。「草案」は毛沢東自身が指導し作成したものであり興味ある文献である。
「草案」冒頭部分には「人の正しい思想はどこからくるのか」(『人的正確思想是從那裏來的?』)という弁証法的唯
物論の認識論が以前の『実践論』よりより発展した形で説明してある。そして「草案」作成の基礎となった原資
料である、合計二〇部の重要調査資料が添付されると書いてあるがわれわれの手に入れることはできない。

「草案」は一〇項目にわかれており、第二項目に、一九六二年八月の北戴河中央工作会議および前述した第八期
十中総会において、毛沢東が語った社会主義社会の歴史的な性格規定についてつぎのようにいっている。「毛沢東
同志は、社会主義社会はかなり長い歴史的段階であり、社会主義という歴史的段階のなかには、まだ階級、階級
矛盾、および階級闘争が存在しており、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在しており、資本主義復活の
危険性が存在していると、くりかえして指摘している。かれは、さらにこの種の闘争が長期にわたる、複雑な性
格のものであると強く指摘し、階級矛盾と階級闘争の問題を正しく処理すること、敵味方の矛盾と人民内部の矛
盾を正しく処理すること……」。そしてさらに前述した八期十中総のコミュニケの部分を再説している。第三項
目で、当時の中国社会の階級闘争の諸現象についてふれており注目に値する。長くながあげておこう。(1)くつ
がえされた搾取階級、地主・富農は、常に復活を企てており、機をみては反撃に転じて財貨を奪回し、階級的報

復を行ない、貧農、下層中農に打撃をあたえようとしている。(2)くつがえされた地主・富農分子は、八方手をつくして幹部を腐敗させ、指導権を奪いつつにしている。一部の人民公社・生産隊の指導権は、事実上かれらの手に落ちている。その他の機関の一部にも、かれらの代理人がいる。(3)地主・富農分子が、封建的・宗族支配を復活するための活動をすすめ、反革命宣伝を行ない、反革命組織を發展させている地方もある。(4)地主・富農分子と反革命分子は、宗教および反動的な土俗秘密結社を利用して、大衆をあざむき、犯罪活動を行なっている。(5)反動分子のさまざまな破壊活動、たとえば公共財産破壊、情報窃取さらには殺人・放火までが、各地に発生している。(6)商業面では、投機・相場の空取引活動が重大化しており、地方によっては、この種の動きが非常な勢いで進んでいる。(7)被雇用者に対する搾取、高利貸し、土地売買の現象も発生した。(8)社会にはそれらの投機空相場をずっと続けている旧からのブルジョア階級分子のほかに、新たなブルジョア階級分子が現われ、投機、搾取によって大々的に私財を増やしている（傍点引用者）。(9)機関や集团的経済のなかに、一群の汚職・窃盗分子、投機・空相場に手をだす分子、腐敗墮落分子などが現われ、地主・富農分子と結託して、悪事を働らいている。これらの分子は、新たなブルジョア階級分子の一部、あるいはその同盟軍である。階級闘争のこのような現状をふまえて、〈過渡期階級闘争理論〉が形成されてきたのである（拙訳宮效聞他編著『社会主義企業管理』『立命館経済学』昭和五十年四月の訳注一四三―一四五ページを参照のこと）。そして農村における全面的な「社会主義教育運動」は、この「草案」にもとづき展開されるが、劉少奇派の必死の反対に会い、毛沢東が語ったように「社会主義教育運動」では階級闘争の問題は解決されず、プロ文革によって解決の端初をつかむことになるのである。他方、この時期に、国際的には、国際共産主義運動の戦略戦術をめぐって中ソ間で大論争が生じたことは前述したが、中ソ論争は、つきつ

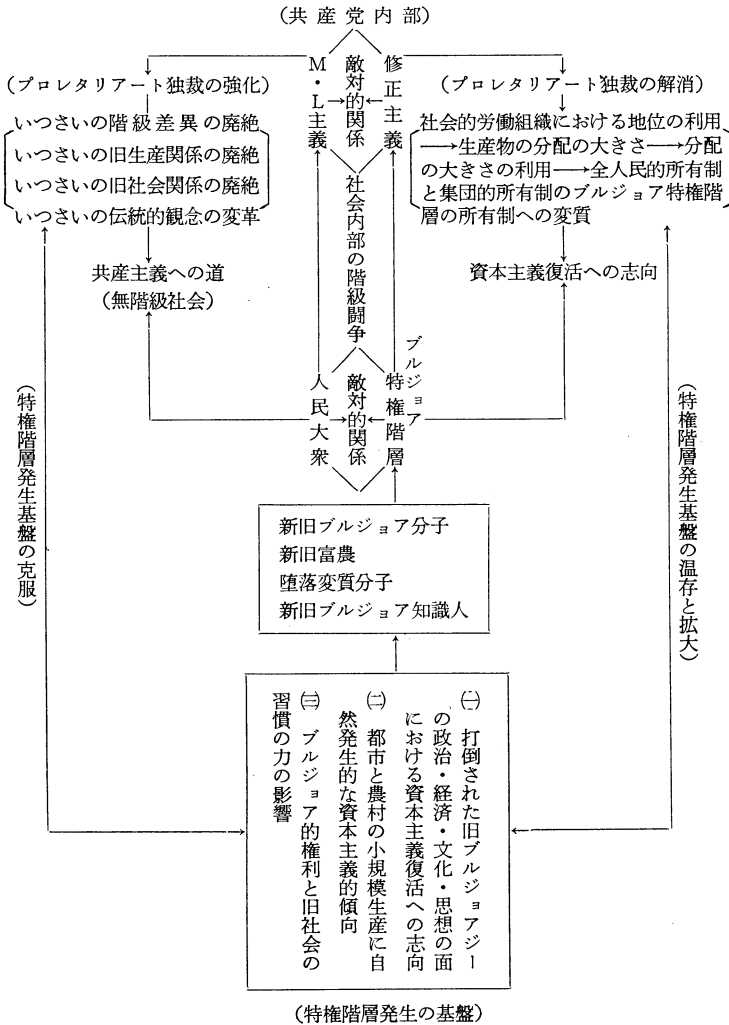
めれば、ソ連共産党がマルクス・レーニン主義の基本原理を否認したことによって生じたのである。中ソ論争の歴史をさかのぼれば、ソ連共産党二〇回大会にさかのぼることができるが、今日の国際的な現代修正主義の諸現象は、若干の留保をおけば、まさにソ連共産党第二〇回大会におけるフルシチョフ修正主義にそのイデオロギー的基礎を求めることができる。⁽⁸⁾ソ連共産党は第二十二回大会（一九六一年十月）において、「全人民の国家」、「全人民の党」というプロ独裁否定の党新綱領を採択した。中国の「過渡期階級闘争理論」の形成は、ソ連共産党第二〇回大会以後のソ連社会の現状認識と不可分の関係で形成されていったのである。レーニンは、第二インターナショナルの修正主義（ベルンシュタイン主義・カウツキー主義等）の発生する階級的、経済的根源を『帝国主義』やその他の著作において明解に解明している。ところで、社会主義社会の下における修正主義の発生の階級的、経済的基礎をどのように考えたらよいのか、もしこのような階級的、経済的基礎があるとすれば、それはどのようにして形成されるのであろうか。唯物史観の公式を前提とするかぎり、国家権力の中枢部にあらわれた修正主義発生にかんする説明は、社会主義下においてもその階級的、経済的基礎から説明しなければならぬ。社会主義下の修正主義は国際帝国主義の政策の産物でもあるともいわれている。唯物弁証法は、「外因を変化の条件、内因を変化の根拠とし、外因は内因をつうじて作用する」⁽¹⁰⁾ものと考ええる。社会主義社会の共産党内部に現出した修正主義的諸傾向が、その現実的根拠をその社会内部における階級的、経済的根拠に求められるとすれば、国際帝国主義からの影響は、社会内部の現実的根拠としての階級的、経済的基礎を媒介してあらわれるのである。中国共産党はソ連修正主義党との論争の過程の中で、中国社会の階級矛盾と階級闘争の存在の認識を深化させると同時に、ソ連共産党にあらわれた修正主義的潮流の階級的基礎の分析をあわせてすすめたものと考えられる。国際帝国主

義のみならず現代修正主義からの国際的影響は、中国においては、劉少奇路線に代表される修正主義的路線に媒介されて出現した。『国際共産主義運動の総路線についての提案』(一九六三年六月十四日)において、プロレタリアートが権力をとった後も、非常に長い歴史的時期にわたって階級闘争が継続することは階級闘争の客観的法則であるとして、レーニンの諸命題をあげ、あらゆる社会主義国の実際の生活が、レーニンの諸命題を実証しているとしている。さらに、『提案』は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理の問題として、マルクス『ゴータ綱領批判』で述べている、資本主義社会と共産主義社会Ⅱ共産主義社会の高い段階(無階級社会)とのあいだにある政治的過渡期(革命的転化の時期)の国家は、△プロレタリアート独裁△であるという思想と、レーニンが『国家と革命』で言及している「資本主義社会から共産主義社会への移行は、『政治的過渡期』なしには不可能である。そして、この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁でしかありえない」という思想を強調し、これでもって、ソ連共産党の「全人民の国家」理論が現実の実生活のみならず、思想的にも、マルクス・レーニン主義の普遍的真理から逸脱していることを指摘している。『提案』の社会主義社会の性格規定は、八期中中総のコミニケ△過渡期階級闘争理論△をよりいっそう具体的に明示したものであるけれど、『フルシチョフのエセ共産主義とその世界的教訓』(一九六四年七月十四日、第九評、今後『エセ共産主義』と略す)において、△過渡期階級闘争理論△を総括的に規定したものと考えてよいだろう。『エセ共産主義』では、それでは社会主義社会(共産主義の低い段階)の性質がどのように把握されているのか。『エセ共産主義』はいう。「プロレタリア革命とプロレタリアート独裁の学説は、マルクス・レーニン主義の真髄である」。(12)プロレタリア革命とプロレタリアート独裁を堅持するかどうか、マルクス・レーニン主義と修正主義をわけれるメルクマルである。社会主義社会の特徴は、

政治的には、プロレタリアート独裁がブルジョアジーの独裁にとつてかわり、経済的には、生産手段の共有制が私有制にとつてかわっていることである。プロレタリア階級の政治先行プロ独裁先行が史的唯物論の基本原理＝真髓であるとすれば、社会主義社会の特徴は、とりわけ、プロレタリアート独裁にその特徴が求められるのであり、生産手段の公有制は社会主義社会の第一歩にすぎない。一般的にいつて、一つの社会構成体から他の社会構成体への「過渡期」において、決定的重要性をもつのは政治（政治は主観的なものでなくて客観的なものである）。レーニンは十月革命以後の所論においてこのことを強調してやまなかった。「政治は経済に対して優位を占めざるを得ない」というレーニンのテーゼは、過渡期という時代にはとくに普遍的真理である。

社会主義とは階級を廃絶する過程のことである。社会主義社会では、生産手段の私有制が共有制に変革されて、生産手段の共有制という基礎の上に新しい人間関係、平等な人と人との関係（具体的には、幹部と大衆、管理要員と労働大衆など）が成立している。しかし、プロレタリアート独裁のたえざる強化によって、旧社会が残っていた人と人との関係を徹底的に変革しなければ、生産手段の共有制によって自動的に平等な人間関係が成立する保障はない。ソ連社会の経験はこのことを如実に示している。共産主義の第一段階である社会主義では、打倒された旧ブルジョアジーの政治、経済、思想・文化・教育の各分野における旧ブルジョアジーの腐食作用や、都市と農村の小規模生産における自然発生的な資本主義的傾向の存在、ブルジョアの権利と旧社会の習慣の力の影響等が、現実的基礎として存在するために、もし、プロレタリアートの独裁を厳格に不断に実行しなければ、党機関や政府機関、国営企業や文化・教育部門等の「幹部」は自らを特殊化し、「社会的富の分け前をうけとる方法と分け前の大きさが、他とちがう人々の大きな集団」⁽¹³⁾となり、「一定の社会経済制度のなかで占めるその地位がちがうこ

社会主義社会における階級闘争の特殊性



(特権階層発生の基盤)

とによって、そのうちの一方が他方の労働をわがものとすることができるような、人間の集団⁽¹³⁾である特権階層を形成する。共産党内部の修正主義者とは、このような特権階層の代理人であり、共産党内部の修正主義者は生産手段と消費手段に対する支配権を利用して、全人民的所有制と集団的所有制を特権階層の所有制に変質せようとする。これらの修正主義者⇨特権階層とは反対に、マルクス・レーニン主義者⇨革命的人民大衆は、プロレタリア階級の独裁を先行させて、社会主義革命と社会主義建設をおこない、共産主義への移行を準備する。マルクス主義の最終目標である共産主義（無階級社会）への移行には、かならず、過渡的段階としてのプロレタリア階級独裁を必要とする。そして、この独裁は、あらゆるいっさいの階級差異を廃絶し、この階級差異の基礎であるあらゆるいっさいの旧生産関係を廃絶し、これらの生産関係に照応するあらゆるいっさいの社会関係を廃絶し、そして、この社会関係から生じるあらゆる観念の変革を任務とする。プロレタリア階級は、継統革命をおこない、以上の四つの諸関係を完璧に廃絶しなければならない。これなくして、共産主義への移行など問題にならない。共産主義への移行の問題として、所謂「三大差異」——都市と農村とのあいだの差異、肉体労働と頭脳労働とのあいだの差異、労働者と農民とのあいだの差異——の廃絶の問題がプロ独裁との関連ぬきでよく議論されるけれど、この問題をプロ独裁の問題をぬきに考察することはあやまりである。ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の全面的な独裁がなければ、「三大差異」の廃絶など絵に書いた餅にすぎない。七八ページの図参照のこと。

社会主義社会における階級闘争の特殊性とは、一方においては、プロレタリアート独裁の徹底的強化を通じて、旧社会が残していった人と人との関係の徹底的な変革を志向し、共産主義社会への移行のための具体的準備を徹底的に追求する革命的マルクス主義と、他方において、プロレタリアート独裁を弱めないしは解消して、旧社会

が残していった人間関係の残滓の变革を志向せずに、ブルジョア特権階層を育成し、生産手段の全人民的所有制と集团的所有制から特権階層の所有制への転形をめざし、資本主義の道を歩む修正主義との階級闘争である点にある。社会主義社会における階級闘争の重要な特質の一つは、社会主義社会の階級闘争は権力をにぎっている前衛党内部に反映することである。社会主義社会にも前述したような階級闘争が存在するかぎり、共産党内部にも \wedge 社会主義への道 \vee と \wedge 資本主義への道 \vee をめぐる二つの路線の対立が深刻に反映せざるを得ず、これはさけておることのできない客観的法則である。毛沢東路線と劉少奇路線の対立とはまさにこのようなものであった。

社会主義社会の階級闘争は、とりわけ、プロレタリアート独裁を徹底的に強固にするか、それともプロレタリアート独裁を解体するのかがという点に集中的に表現される。共産党内部のマルクス・レーニン主義路線は、プロレタリアート独裁の強化を主張するけれど、修正主義路線はプロレタリアート独裁の解体を主張する。プロレタリアート独裁は、レーニンがいうように階級闘争の継続であるから、プロレタリアート独裁の歴史的経験（バリ・コミニオンと十月革命を含む）とは、階級闘争の歴史的経験である。『エセ共産主義』によれば、毛沢東は、レーニンとスターリンがなしえなかった社会主義社会の階級闘争の歴史的経験 \parallel プロレタリアート独裁の歴史的経験を全面的に分析して、つぎのように主張している。「社会主義社会では、生産手段の所有制の社会主義的改造をなしとげたあとでも、階級矛盾はやはり存在し、階級闘争は決してなくなならない。社会主義の全段階を通じて、社会主義と資本主義というこの二つの道の闘争がつらぬいている。社会主義の建設を保証し、資本主義の復活をくいとめるには、政治戦線、経済戦線、思想・文化戦線で社会主義革命をさいごまでやりぬかなければならない。社会主義の完全な勝利は、一代や二代の人間で解決できるものではなく、五代、十代、さらにもっと長い時間を

かけて、はじめて完全に解決することができるのである」。以上は『エセ共産主義』の中で展開されている基本的な論点を説明したものであるが、『エセ共産主義』では、北戴河の中央工作会議における毛沢東の発言、第八期十中総コミニケの思想や「草案」の規定よりも、もっと具体的、理論的に社会主義社会における階級闘争の必然性が説明されているのである。

これまで、△過渡期階級闘争理論▽が、生産手段所有制の社会主義的改造後、どのようにして展開されてきたのかを検討してきた。△過渡期階級闘争理論▽の形成は、所謂毛沢東路線と劉少奇路線の二つの路線の熾烈な階級闘争の結果生みだされたものとして把握しなければならない。でなければプロレタリア文化大革命を理解することはできないであろう。中国の解放以前から内在していたといわれる毛沢東路線と劉少奇路線という二つの路線の対立が表面化する決定的なモメントは、現代世界の基本矛盾の特殊性認識の一環としての生産手段所有制変革後の社会主義建設の路線をめぐる問題である。それは社会主義とは何か、換言すれば社会主義の目的とは何か、そしてその目的によって規定される社会主義社会の性質の特殊性をどのように把握するのかがという問題と社会主義建設の方法をどのように考えるのかという問題に集約することができる。それはまた人民大衆を解放する思想としてのマルクス・レーニン主義思想をいかに深刻に思想的、そして哲学的に深く理解しているかという思想問題、理論問題でもあった。世界（客観的世界のみならず主観的世界をふくむ）を変革し、認識する原点である人類解放の思想をどれだけ深刻にとらえているのかという問題でもあった。思想問題はその本質からいって抽象的なならざるを得ない。人民大衆に思想が把握されることによって思想は抽象的なものから、物質的なもの具体的なものに転化する。毛沢東路線における社会主義建設の基本的方法は、プロレタリア階級独裁を全面的に実行しな

がら、広範な人民大衆の主観能動性に依拠した大衆運動としておこない、人民大衆を政治的、思想的、経済的に全面的に解放し、社会主義社会の眞の主人公になる方向で社会主義建設をおこなうことである。これに対して劉少奇路線の社会主義建設の方法の中心問題は、与えられた現状、つまり「与件」の枠の中でいかに「能率」よくもしくは「効率」よく社会を管理するかという問題であった。劉少奇路線の社会主義建設は、したがって、 \wedge 資源の最適配分 \vee という経済管理が中心問題にすえられる。¹⁴⁾一般的にいつて、与えられた現状を徹底的に変革する問題は、国家権力の問題である。資本主義の下では国家権力奪取の問題であるが、社会主義の条件下ではプロレタリアート独裁をよりいっそう強化する問題である。だとすれば、与えられた現状を徹底的に変革する方法は、政治問題であり、階級闘争を先行させる問題である。政治 \parallel 階級闘争を先行させなければ、必然的に現存の秩序維持、現状肯定の立場にたたざるを得ない。毛沢東路線は、階級闘争先行を基礎とした継続革命による社会主義建設を考え、ソ連方式の経済管理を基礎とした現存秩序尊重の社会主義建設を考える劉少奇路線と真向から対立した。この意味で、毛沢東路線と劉少奇路線の対立とは、中国における中ソ対立の国内版といえる。

- (1) 福島正夫「社会主義社会における階級闘争の理論」（中国研究所編『中国のめざすもの——文化大革命の全体像』所収、徳間書店、一四一—一四二ページ）。なお、スターリン時代のいたましい肅清の問題は、中国ではどのように総括され、実践的に克服されたのであろうか。プロ文革で、革命的大衆から劉少奇についてあれほど徹底的に批判された鄧小平氏は、現在、党中央委員会副主席、中央政治局常務委員で、また國務院副総理として党と政府機関において重要な任務についているが、これなどは、スターリン時代の肅清問題の総括の上になつてとられた措置であると思われる。
- (2) 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」（『毛沢東著作選』外文出版社北京六五一—ページ）
- (3) 主観能動性というカテゴリーは、毛沢東哲学の特色の一つであるが、これをもって毛沢東哲学のすべての特徴とみならず見解があるが、これは誤りである。主観能動性とは、たんに、行動し、仕事をするだけさをさすのではなく、

脳髓を働かし、思想、理論、計画、政策等々を提起することをそのうちに内包している概念である。主観能動性をやる気ややる意志があるかないかというような問題だけに矮小化して理解するのは誤まりである。毛沢東哲学は弁証法的唯物論の認識論において、哲学のレーニンの段階をさらにひきあげている。詳しくは別の機会に論じたい。

(4) 藤村俊郎氏の労作『中国社会主义革命』亜紀書店の「Ⅳ大躍進とは何か」を参照。

(5) 本年（一九七五年）の初めから、プロレタリア階級独裁の理論学習運動が毛沢東の呼びかけによって展開されているが、この理論学習運動においては、生産諸関係の総和と経済的構造の問題が明確にとりあげられており、今後の展開が期待される。この理論学習運動は、政治経済学の理論的諸問題について、日本のマルクス経済学界でありとりあげられないような根本的な問題ではあるがかなりきめのこまかい議論がすでにおこなわれており、今後ますます展開されるであろう。ただ中国で経済理論が問題になる場合、何のために、誰のためにという原則問題をふまえておこなわれる。

(6) 毛沢東「中国共産党全国宣伝工作会議における講話」（一九五七年三月十二日）『毛沢東著作選』外文出版社北京六七六ページ。

(7) 『世界』昭和四二年四月号所収。『アジア経済旬報』一九六七年十一月・下旬号にもおさめられている。

(8) 毛沢東がいうように中ソ両共産党の対立は、ソ連共産党第二〇回大会より突然生じたのではない。毛沢東はいう、「社会主義国家およびマルクス・レーニン主義政党的間で発生したこの論争の根は、きわめて深く、問題ははるか以前に始まっている……」（新島淳良編『最高指示』三一書房一五二ページ）。

(9) 毛沢東は一九五六年十一月十五日の中国共産党第八期中央委員会第二回総会における講話において、フルシチョフの修正主義の登場についてその洞察力するどく、つぎのようになる。「わたしが思うには、二つの『刀』があり、一つはレーニンで、一つはスターリンである。現在、スターリンという刀は、ロシア人に捨てさられた」「レーニンという刀も、現在、ソ連の一部の指導者にいくら捨てさられているのではないだろうか？ わたしの見るところでは、これもかなり捨てさられている。十月革命はまだききめがあるかどうか？ まだ、各国の手下とすることができかどうか？ ソ連共産党第二十回大会におけるフルシチョフの報告は、議会の道をへて国家権力をかちとることができるといっている。つまり、各国はもう十月革命に見習わなくてもよいということである。この門を開いたからには、レーニン主義は基本的に捨てさられたことになる」（『人民日報』『紅旗』『解放軍報』編集部「レーニン主義」）

社会主義社会の過渡期的性格（小野）

義なのかそれとも社会帝国主義なのか？——偉大なレーニンの生誕百周年を記念して——」『北京周报』一九七〇年十七号所収、七ページ）。

(10) 毛沢東「矛盾論」『毛沢東著作選』外文出版社北京一一二〇一—一三三ページ。

(11) レーニン宇高基輔訳『国家と革命』岩波文庫一一二一—二二二ページ。レーニンのこの引用は、マルクス『ゴータ綱領批判』からの引用である。

(12) 『人民日報』『紅旗』両編集部「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」（一九六四年七月十四日）『國際共産主義運動の総路線についての論戦』北京外文出版社、四六七ページ。

(13) レーニン「偉大な創意」『レーニン全集』㊟大月版、四二五ページ。

(14) △資源の最適配分▽という思想は、近代経済学の根本的思想である。私見によれば、プロレタリア階級は無階級社会というまったく新しい文明を創造するのである。マルクスとエンゲルスが『共産党宣言』でのべているようにいっさいの伝統的観念を変革しなければならないとすれば、ブルジョア思想の刻印のうたれているいっさいの思想を変革しなければならない。プロレタリア階級が創造する新しい文明が、たとえ、表面的にブルジョアジーの創造したものと類似していたとしても、まったく性質の異なったものになっているであらう。

三 社会主義社会の過渡期的性格と「スターリン問題」

最後に、本稿の課題に関連する範囲において、△スターリン問題▽について若干の考察を加え、△過渡期階級闘争理論▽を別の角度から検討することにした。今日、日本のマルクス主義思想界におけるスターリン評価は、主にスターリニズムとして消極的ないしは全面的否定という形でしか評価されていないのが現状のようである。中国のマルクス主義者がいうようにスターリンの評価はあまり軽率に判断を下してはならないかもしれない。しかし、国際的な「スターリニズム」批判の環境の中で、スターリンの積極的側面を積極的に公然と評価

しているのは、国際的にみても中国共産党だけのようである。現代のマルクス主義について言及するかぎり、 \wedge スターリン問題 \vee はさけてとおることのできない問題であるように思われる。問題は、スターリン評価の基準となるべきものを主にどこにおいたらいいかということである。それは、プロレタリア世界革命とプロレタリアート独裁ということになるのではなからうか。本章では、本稿の課題に関連するかぎりでの \wedge スターリン問題 \vee を、中国の文献に即して、若干の整理をするにすぎない。そうすることによって、 \wedge スターリン問題 \vee の問題の奈辺がどこらあたりにあるのかの手がかりを得ることができたらよいと考えている。

中国共産党が所謂 \wedge スターリン問題 \vee について論及した公式文献は、ソ連共産党第二〇回大会とハンガリー事件に関連して発表した、「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」（一九五六年四月五日『人民日報』）と「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」（一九五六年十二月二十九日『人民日報』）と所謂中ソ論争の中でやつぎばやに発表した諸論文の中の第二評にあたる「スターリン問題について」（一九六四年三月三十一日「国際共産主義運動の総路線についての論戦」所収）である。さらに、中国共産党機関紙である『紅旗』の一九六四年第二号増刊号における鄭言実論文「斯大林反対托洛茨基主義和布哈林主義的闘争」（「スターリンのトロツキー主義とブハーリン主義に反対する闘争」なる長大な論文がある。この鄭言実論文は、当時の「中共」の公式的見解に準じて考えてよいであろう。そして、プロ文革のさ中に発表された『紅旗』と『人民日報』の両編集部による「偉大な歴史的文献」（一九六七年五月十八日『人民日報』）とこの「偉大なる歴史的文献」の学習資料として一九六七年第七号『紅旗』に発表された『偉大な歴史的文献』の学習資料の両論文において \wedge スターリン問題 \vee がとりあつかわれている。

所謂「スターリン問題」についての問題性は、それが、単にスターリン個人に対する評価でなく、レーニン死後におけるプロレタリアート独裁の歴史的経験をどのように総括するかという問題、換言すれば、レーニン死後における国際共産主義運動の歴史的経験をどのように総括するかという問題である。これが、「スターリン問題」をとりあつかう場合の中国共産党の基本的観点である。一国で社会主義が建設できるかどうかという「一国社会主義論」をめぐるスターリン対トロツキーの論争は、ここでは問題にならない。一国で社会主義建設は不可能であるというトロツキーの見地はここでは問題にしない。中国のマルクス主義者の見解は、一国で社会主義建設は可能であるが、社会主義の「最終的勝利」は一国では不可能であり世界革命に依存しているという見地である。まず、中国のスターリン評価について、前記にあげた諸論文に共通してあらわれている特徴は、スターリンは、国内的関係では、レーニン主義の路線を守り、ソ連共産党とソ連人民を指導し、プロレタリアート独裁をまもり、強化し、社会主義的工業化と農業集団化を実現し、社会主義革命と社会主義建設の成果をかちとったという積極的評価であり、対外的な関係では論文「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」において、「第二次世界大戦中には、ソ同盟は、ファシストをうち破る主力となってヨーロッパ文明をすくうとともに、東方の人民が日本軍国主義をうち破るのを援助したのであった。これらすべての輝かしい成果は、全人類に社会主義と共産主義の光明にみちた前途をさしめし、帝国主義の支配を大きくゆるがし、恒久平和をめざす全世界の闘いの中で、ソ同盟を最初の、もっとも強固な堡壘にした。ソ同盟は、他のすべての社会主義国の建設をげまし、これを支持し、全世界の社会主義運動と植民地主義反対運動・人類の進歩をめざすあらゆる運動をあげました。これらはすべて、ソ同盟人民とソ同盟共産党が人類史上にうみだした偉大な業績である。……中略……」

と評し、このような「偉大な業績をかちとることができた中にはスターリンの「不滅の功績」がふくまれていると考えている。「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」における、スターリンの国際的側面についての評価は、「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」の考え方と基本的に同一である。「スターリン、かれの指導するソ連の党と政府は、総じて、プロレタリア国際主義に合致する対外政策を実行し、中国人民の革命闘争をもふくむ世界各国人民の革命闘争に大きな援助をあたえた。」(傍点引用者)という『スターリン問題』における評価と同じ見地である。スターリンの否定的、消極的側面については、「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」と「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」そして「スターリン問題」の三論文と、「偉大な歴史的文献」と「偉大な歴史的文献」の学習資料」の両論文とでは非常に異なった評価が横たわっている。前記の三論文では、スターリンの否定的側面の基本的特徴は、スターリンの「思想方法」としての弁証法的唯物論の認識論からの乖離の結果として生じる対内外政策における誤りについて言及されていることである。たとえば、反革命肅清の拡大化・民主主義的中央集権制の原則の部分的破壊・大国的排外主義等である。鄭言実論文「斯大林反对托洛茨基主義和布哈林主義的闘争」におけるスターリンの欠陥として、彼が弁証法的唯物論から離れ、形而上学と主観主義におちいったという指摘は、前記三論文と同じ指摘などであるが、鄭言実論文の新しい指摘は、スターリンの主観主義的「思想方法」から生じた誤りの例として、一九三六年にはやまってもあらゆる搾取階級の消滅をいい、搾取階級は廃絶されたということを宣言したことであると述べている。一九三六年のスターリンの階級闘争消滅論の誤りを述べたのは、日本で知りうる限りおそらくこの鄭言実論文がはじめてである。だが、この段階では、またスターリンの「階級闘争消滅論」に対しては、「思想方法」としての弁証法的

唯物論からの乖離の結果発生したところの具体的な誤謬の一例としてしか把握されていない。「偉大な歴史的文献」の学習資料」において、はじめて「過渡期階級闘争理論」の視点から、一九三六年のスターリンの「階級闘争消滅論」の理論的な誤謬を説明している。「学習資料」はいう。「ソ連が社会主義の国家の工業化と農業集団化を実現したのち、すなわち生産手段所有制の社会主義的改造を基本的に完成したのち、スターリンは、一九三六年十一月にひらかれた第八回臨時全同盟ソビエト大会において、『ソ連憲法草案について』という報告をおこなった。この報告は、ソ連の社会主義革命と社会主義建設の偉大な成果を正しく総括しているが、同時に、そこにスターリンの理論面における欠点を集中的に反映している。」（『通知——中国共産党中央委員会・一九六六年十月六日——偉大な歴史的文献』北京外文出版社、五五ページ、傍点引用者）。

スターリンは、資本主義から共産主義（無階級社会）への移行の全歴史的時期にわたって、すなわち、社会主義の全歴史的時期にわたって、階級と階級闘争が存在することを理論的に把握していない。このことは、『ソ連憲法草案について』、『弁証法的唯物論と史的唯物論』（一九三八年九月）そして『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』（一九五二年）等において知ることができる。「ソヴェト同盟憲法草案について」（一九三六年十一月二十五日）の中で、スターリンは、一九二四年から一九三六年にいたる期間の、ソ同盟の経済的構造の変化を総括して、「国民経済のすべての分野における社会主義制度の完全な勝利は、いまや事実である。……中略……このことは人間による人間の搾取が根絶され、一掃されて、生産用具と生産手段の社会主義的所有が、わがソヴェト社会のゆるぎない基礎として確立されたことを意味する。」（スターリン『レーニン主義の諸問題』一九五二年版、大月書店版、スターリン全集刊行会訳、七二三ページ）と述べ、ソ同盟のこのような経済的構造の変化にもなつてソ連社会の階

級構成も変化したとして、つぎのようにいっている。「地主階級は、国内戦が勝利におわたつた結果、すでに一掃されてきた。その他の搾取階級については、彼らは、地主階級と運命をともにした。工業の分野では資本家階級がなくなった。農業の分野では富農の階級がなくなった。商品流通の分野では商人と投機者がなくなった。すべての搾取階級は、こうして一掃されてしまったのである。」(前掲書、七二三ページ)。すべての搾取階級消滅宣言である。そして、このような階級構成の変化は、「第一に、労働者階級と農民とのあいだの境界も、また、これらの階級とインテリゲンツィアとのあいだの境界も消されつつあること、古い階級的排他性が消滅しつつあることを、ものがたっている。このことは、これらの社会的グループのあいだの距離がますますちぢまりつつあることを意味する。……第二に、これらの社会的グループのあいだの経済上の矛盾がすくなくなり、消しざられつつあることを、ものがたっている。……最後に、これらのグループのあいだの政治上の矛盾もまたすくなくなり、消しざられつつあることを、ものがたっている。」(前掲書、七二六ページ)。また、一九三八年九月に書かれた『弁証法的唯物論と史的唯物論』において、「生産関係が生産力の性格に完全に照応している例は、ソ同盟における社会主義的国民経済であつて、ここでは生産手段の社会的所有が生産過程の社会的性格に完全に照応し、そこではそのために経済恐慌もなく生産力の破壊もないのである。」(石堂清倫訳『弁証法的唯物論と史的唯物論』国民文庫、二二六ページ)として、ソ連邦の社会主義的国民経済における△生産関係と生産力のあいだの矛盾▽を認めていないのである。しかし、スターリンは、死ぬ前年、一九五二年に△生産力と生産関係のあいだの矛盾▽の存在を指摘している。それはヤロシェンコの誤りについて言及した部分である。「ヤロシェンコは、社会主義のもとでは社会の生産諸関係と生産諸力とのあいだにはなんらの矛盾もない、と主張しているが、それはまちがっている。もちろん

ん、われわれの現在の生産諸関係は、それらが生産諸力の成長に完全に照応していて、それら諸力を非常に急速に前進させる、とい時期を経過しつつある。しかし、これにやすんじて、わが生産諸力と生産諸関係とのあいだになんらの矛盾も存在しないと思つたら、それはただしくないであろう。生産諸関係の発展が生産諸力の発展から立ちおくれつつあり、またこれらからも立ちおくれるかぎり、諸矛盾はかならずあるし、またあるだろう。指導的、諸機関のただし政策のもとでは、これらの諸矛盾が敵対に転化することはありえないし、またこのばあいには、生産諸関係と社会の生産諸力とのあいだの衝突にまで立ちいたることもありえない。もしわれわれが、同志ヤロシエンコのすすめるような、ただしくない政策を実行するなら、問題はべつである。そのばあいには、衝突はさげがたいであろうし、われわれの生産諸関係は生産諸力のより以上の発展のきわめて重大なブレーキに転化するおそれもあるのである。」(スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』飯田貫一訳、国民文庫、八〇～八一ページ)と。

中国の生産手段所有制の社会主義的改造の達成した一九五六年の時期は、ソ連邦において生産手段の所有制の社会主義的改造を実現した一九三六年に対応するが、中国では一九五七年に毛沢東は生産手段所有制の社会主義的改造後における△階級闘争存続論△を主張したのに対して、スターリンは、反対に△階級闘争消滅論△を主張したことは対照的なことで、この点が毛沢東理論とスターリン理論の決定的に重要な相異の一つである。なお、興味あることは、毛沢東の『実践論・矛盾論』は一九三七年に執筆されているが、翌年の一九三八年にスターリンの哲学論文『弁証法的唯物論と史的唯物論』が書かれていることである。スターリン哲学における認識論の特徴が形而上学的反映論であるとすれば、毛沢東哲学における認識論が実践論⇨能動的革命的反映論の形態で把握

されている点が特徴的である。

中国のマルクス主義者の見地は、スターリンはかなりの誤りを犯したけれど、しかし、スターリンの功績は、彼の誤りより大きいという見地である。このことから、量的比率で表現すれば、スターリンの積極面と消極面の比率が、八対二とか七対三とかになるといわれているのである。量的比率はともかくとして、スターリンがプロレタリア階級独裁を理論的にはともかく、実践的に断固堅持したという点については、マルクス主義の見地にたつかぎり積極的に評価しなければならぬ。スターリン問題についての評価では、実践的な側面と理論的な側面とを一応区別しておかなければならない。中国自身は、中国革命のなかで、スターリンの悪い影響をかなり受けて中国革命はすくなくならずの実害を受けているが、中国のマルクス主義者のすぐれた点は、『矛盾論』で示された外因は内因を通じて作用するという視点から、中国革命がスターリンの誤まった指導（外因）を受け入れたのは、自分達に思想上の弱点（内因）があったからであるというように受けとめていることである。自分達の誤りを他人のせいにしていないことである。スターリンを理論的にも実践的にも全面的に否定すれば、かならず、プロ独裁を否定し、レーニン主義をも否定することになる。そして、たとえ、毛沢東思想を評価したとしても、スターリンを評価しないことは、レーニン死後からソ連共産党第二〇大回会にいたるソ同盟の国内外において果たした役割を過小評価することになりかねない。⁽¹⁾日本の所謂「正統派マルクス主義者」の核心的部分は、個人崇拜反対を理由に、プロ独裁を否定し、スターリンの積極的部分をすでに否定し所謂「反スタ」になっている。いずれもっとはつきりとして上記のような立場が誰の眼にもわかるように顕在化するであろう。「正統派マルクス主義者？」がスターリンを擁護するにしても、せいぜい、スターリンが堅持した党の組織性とか規律だけを評価するにすぎない。

レーニン論文「政論家の覚え書」(一九二四年四月十六日)の中で、ロシアのある寓話を引用して、ローザ・ルクセンブルグを「鷲」にたとえ、第二インターの修正主義者、カウツキー等を「牝鷄」にたとえて、つぎのようにいつている。「鷲は牝鷄よりひくくおることもあるが、しかし牝鷄はけっして鷲のように飛びあがれない、ということである。」(『レーニン全集』③二〇八ページ)と。ローザは、革命家として誤まつたけれど、第二インターのカウツキーは反革命家であった。カウツキー達にはローザの誤まりを指摘する資格はない。今日における内外の反革命的現代修正主義についてもこのことがいえる。偉大な革命家ローザ・ルクセンブルグの歴史において果した役割と、スターリンが歴史において果した役割を比較することが許されるとすれば、スターリンの方がはるかに大きな役割を果したではないか、というのが中国のマルクス主義者の見地ではなからうか。⁽²⁾

(1) 哲学上の諸潮流の特徴を典型的に図式的に示せば、つぎのようである。考え方として、学問と政治、理論と実践をきりはなしているという点では、「日共系正統派マルクス主義者」と所謂「新左翼系マルクス主義者」とは、共通性をもち、ただ異なるのは、前者は、ブハーリン的傾向をおび、後者は、デボーリン的傾向をもつにすぎない。国際的にみれば、ソ連は、総じて、デボーリン的であり、東独がブハーリン的傾向をもつ。毛沢東思想は、デボーリンやブハーリンの思想とはいうまでもなく本質的に異なり、さらにスターリンの思想とも異なる。学問と政治をきりはなすのも一つの政治的立場である。

(2) ローザ・ルクセンブルグについて、中国においてつぎのような文献がでている。程人乾『ローザ・ルクセンブルグ』(盧森堡)商務印書館一九七二年北京)

本稿は四年ほど前に書いたものであるので、今回発表にあたり若干の修正と注をつけ加えた。なお、資料のとりあつかいに若干不適切なところがあるかもしれないが、四年ほど前に書いた点にかんがみ、了解されたい。